九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大阪大谷大学「教科体育」（1 年時生）授業実践報告

森，祐貴
大阪大谷大学教育学部 ： 非常勤講師

https://hdl.handle.net/2324/4842515

出版情報：オンライン授業の地平 ： 2020年度の実践報告，pp.110-110，2021-04-30．雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution International

大阪大谷大学「教科体育」(1 年時生)授業実践報告

森祐貴

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本科目の授業テーマは、「技能及び指導法を習得し、子どもの運動欲求に応えられる指導者を目指すこと」であり、授業概要は、「体育科(小学校)の運動領域の中から「器械体操」を取り上げ、基礎的技能の習得と指導上の留意点について学ぶ」である。

授業履修者は約 35-70 名であり、基本 1 クラスに相当する 35 名であるが、履修時限の関係上、2 クラスに相当する 70 名での授業もあった。

講義内容として、第 1 回目にオリエンテーションにて授業内容の理解、把握を行なう。次いで、2 回目から体つくり運動、3-7 回目マット運動、8-11 回目鉄棒運動、12-15 回目跳び箱運動と各運動を複数回ずつ連続して取り組む形態であった。

成績評価は、授業への積極的参加度 40%、実技テスト 45%、レポート 15%であった。

1) 第 1-6 回目、第 14 回目(オンライン授業)

学内ポータルサイト(tani-WA)を活用して自宅でのオンデマンド課題を配信して実施した。オンデマンド課題内容として、第 2 回目に体育科授業の課題の抽出を課した。回顧的に自身が経験した体育科授業で顕在化される課題を文章化させて提出させた。また、第 3-6 回目には、体つくり運動・マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動の各運動領域に関する教材研究、第 14 回目には、授業全体の振り返りを課した。第 3-6 回目の授業資料として、文部科学省 HP にて掲載されている「まるわかりハンドブック」を活用した。そして上記の資料から、低、中、高学年ごとの学年域での指導において、どのような違いを考慮して作成されているのか、またどのような指導の違いがあるのかを考えることを授業課題とした。なおオンデマンド課題での文字数設定として 300 文字以上とした。

2) 第 7-13、第 15 回目(対面授業)

体つくり運動・マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動の順番で対面での実技授業を行なった。また、各個人での授業事前の検温による体調把握に加えて、授業内での十分な換気、手指消毒、用具の消毒およびマスクの着用をした上で、通常時間での対面授業を実施した。加えて、ソーシャルディスタンスを取りながら、科目の特性上、補助を必要とする場面を除き、学生同士の接触ができる限りないように留意した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

1)教員側の主観的な所感による学生の反応

教員側の主観的な所感として、通常授業時のレポートよりも今回のコロナ禍でのオンデマンド課題でのレポートの方が内容や質が高いと感じた。また、対面授業形式になってすぐは、授業内の学生同士でのコミュニケーションが少なかったと感じたために、グループ単位での活動を意図的に増やした。結果的に授業後半には、学生同士の教え合いや意見交換などを多く見ることができた。

2)オンライン授業での収穫

当初の予定であれば、授業内にて各運動種目の技能習得や段階的な指導方法を理解と実践を行なうところ、今回は授業前半回にオンデマンド課題として上述した点を授業後半の実技授業回前に行なったことで、学生の理解度が格段に高かった印象があった。これまでの授業内のレクチャーや資料配布では得ることのできなかった本来の基礎的技能の習得と指導上の留意点を学ぶという授業目的を達するものでありオンライン授業実践を通しての発見、収穫であったといえる。

3)今後の課題と可能性

今後、オンライン授業、対面授業両者の利点を合わせたより学生にとって有益な授業作りを行なっていくために今回の実践報告を活かして更なる可能性を探っていきたいと考える。